

JCCA 社団法人 建設コンサルタンツ協会 懸賞論文
2007 年度懸賞論文「みなさんが暮らす日本の街は美しいですか？」

記憶が織り込まれたまちの風景

～記憶の風景の創造的な継承に向けて～

京都大学大学院 工学研究科
都市環境工学専攻 博士後期課程 2 年
山口 敬太

大学の掲示板にて本企画を知りました

1. 「美し」は、愛の感情と結びつく

「うつくし（愛し・美し）」という言葉は、本来親しい間柄、特に親子・夫婦などの間のいたわりの愛情を表したが、のちに小さいものへの愛情を主にいうようになり、さらに一般的に心や感覚に喜びを与えるものの様子をいうようになったという。わが町が「美しい」かどうかは、この語義通りに考えるならば、単純に視覚的に満足するかどうかではなく、町に対して愛情、もしくは愛着を感じるかどうか重要な判断基準となるだろう。町は、単なるモノではなく、人々の生活や歴史がにじみ、人々の心や目による様々な意味づけに満たされた生き物であるからである。

私は京都に住むようになるまで、姫路で生まれ育ったが、故郷を離れた後の帰省の折に、はじめてその美しさを噛み締めることができた気がする。少年時代に遊んだ川や堀、虫を採りに行った裏山、姫路城の石垣や並木などは、しみじみと愛着をわかせるものとなっていた。このような感情は、個人的な記憶と眼前の風景が重なることによって生まれると思われる。私は自身と町との間に、何らかの情緒的な結びつきが生まれていることを実感したのである。この情緒的な結びつきは、おそらく個人的な記憶にとどまらず、例えば父母や祖父母の物語や記憶、長い歴史の中の物語なども関わるであろうし、この結びつきが強いほど、人は町に対してより深い愛着を持つようになるのだろう。「住めば都」という言葉には、こういった意味も含んでいるのかもしれない。記憶や物語に満ちた風景は愛すべき風景であり、愛着が持てる町は美しいのである。

京都観光の魅力についての市民の意識調査の結果^(注1)、市民は、自分たちが住み継いできた京町家や、歴史的に縁の深い旧跡のような「京都ならではの風景」(75.3%)が、「文化財・神社仏閣」(85.6%)に次いで魅力的であると答えており、これは「山紫水明の自然」(39.5%)の2倍近くの回答率である。これから、町の歴史や記憶に対する市民らの意識の高さと、それを目に見える形で表す風景に対する愛着の強さが伺える。それは、伝統行事や伝統産業、伝統文化、京料理など、伝統的なものに対する評価が軒並み高いことから見てとれる。

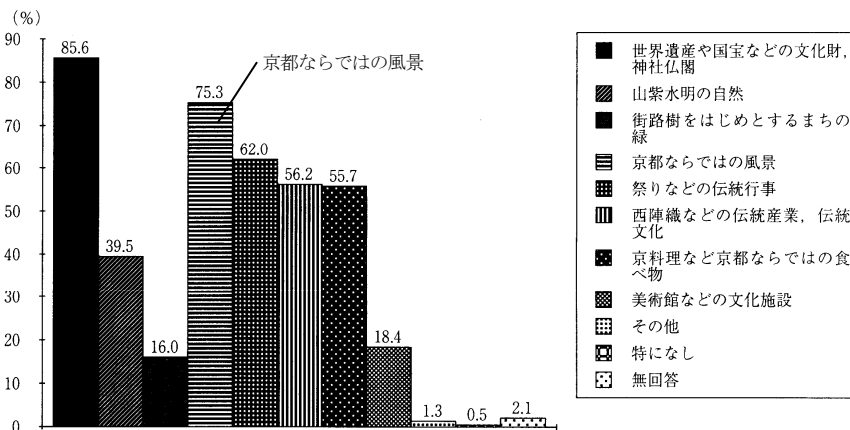


図1 京都市民が考える京都観光の魅力 (回答者：京都市民 1500人)

しかし、一方で、京都ならではの風景が急速に失われつつあるのも事実である。現在の京都の景観に対する市民の意識調査の結果^(注2)、市民の約7割が魅力のある景観は失われつつあると答え、1割がかつての魅力ある景観は失われてしまった、と答えた。今や、長い歴史のなかで培われてきた京都の記憶の風景ですら、喪失の危機にある。



図2 姫路の船場川と堀の風景



図3 落柿舎前の嵯峨野の風景

以下では、私が考える、後世に受け継いでいくべき町の風景について、町の記憶・物語性という観点から述べたい。

2. 古都・京都の記憶の面影を探る

京都の、とくに三山の山の辺は史跡や風光に恵まれ、いかなる所を歩いても心をひくものがあり、その楽しみは尽きることがない。もちろん三山の山並みや身近な河川、歴史的な建造物は京都の誇りであるが、この町に住んでまず驚き、そして真に素晴らしいと思った点は、源氏物語や平家物語のような古典文学に描かれたような風景の面影を、“今も”眼前の風景から感じ取ることができることであった。京都はそういった物語に事欠かない町であった。周囲の山や川、森などは、平安の頃から幾度となく詠まれ続けており、実に豊かで深みのあるイメージで満ちているのである。凡兆が「豆植る畑も木部屋も名所かな」(『嵯峨日記』)と詠んだように、町の至る所に様々な歴史の記憶が重層的に織り込まれており、これを一つ探れば、京都の美しさをまた一つ理解することができるのである。この町の奥深さに私は心酔した。

そして、京都のあちらこちらを訪ね歩くうちに、文学散歩を趣味にするに至った。しかし、私はいわゆる文学青年というわけではない。その目的は、文学のゆかりを訪ねることではなく、町の記憶を、文学を通じて発見することであった。あるときは、古書店で見つけた戦前の紀行文や随筆に描かれた風景の記述を頼りに、またあるときは、近世の名所図会に描かれた景色を求めて、その面影を探し歩くのである。

3. 先人が眺めた嵯峨野の風物を訪ねて

そして、京都に嵯峨野があることを知った。嵯峨天皇が漢詩に、藤原定家が日記や和歌に、去来や芭蕉が日記や俳句に描いた嵯峨野を知った。私は風景を愛でた先人の「まなざし」を拝借して、嵯峨野の野を逍遥し、大沢、広沢の池畔を廻り、小倉山の山容や、閑寂な四囲の風物を眺めた。嵐山の春の桜を眺めては、それを吉野から移植した亀山上皇や夢窓疎石の風流に感嘆し、秋の紅葉を眺めては、源氏が六条御息所を訪れた嵯峨野の晩秋を想い、祇王が嵯峨の山里に住んだ心境に想いを馳せるのである。嵯峨野は、このような古のたたずまいをそこかしこに残していた。歴史上の人物である彼らと同じ地に立ち、彼らが愛してやまなかった嵯峨野の風物を眺めるのは、至福のときであった。このような場所の記憶を伝える風景は、何にも代えがたい貴重な文化資源なのではないだろうか。

私が、そして現代に生きる我々が、このような古都の記憶を実体験として感じることができるのは、先人達の努力によってである。近世後期から近代初期にかけての嵯峨野においては、『平家物語』『祇王』の旧跡である祇王寺や、去来や芭蕉『嵯峨日記』の旧跡である落柿舎など、実に十四もの旧跡が再興されたのである。先人達の風雅と努力には心から敬意を表してやまない。我々は先人達から受け継いだ、これらの風景を後世に残す努力を惜しんではならないだろう。

私は、また、国木田独歩が『武蔵野』で、佐藤春夫『田園の憂鬱』で描いた武蔵野の風情を感じるために、大きな憧れと期待を抱いて武蔵野を訪れたが、彼らが描いた武蔵野はとうとう見つけることができなかつた。公園に、武蔵野の一部だったのであろう雑木林が残るにすぎなかつた。もはや、かれらが描いた武蔵野は紙の上には存在しない。このような無残な「死」を遂げさせてよいのだろうか。

4. 神仏とともに生きた記憶

私は、しばしば、このような文学によって表現された風景の奥に、神々のいる風景を感じることもある。古来の人々が山や水と関わってきたのは、神仏との結びつきを通じてであった。先人は田を潤す水や、山から発する川に神を感じた。神は春先、山から田に降りて来て、秋に再び山に帰る。このような弥生時代から続いてきた人々の生活の記憶は、今も脈々と息づく祭事に見てとることができる。祭や年中行事は、町の歴史や記憶を、その古の姿を、現代に住むわれわれが肌で感じることができる貴重な場である。葵祭や松尾祭を眺めては、人々が神々と密接なかわりを持って生きていたという事実を思い知るのである。子供の頃は得体の知れない神仏の存在など理解できなかつたが、いつも静かで恐ろしくもあつた神社が、縁日になると一変して賑わつた不思議な感覚を、今も鮮明に覚えている。1年に1度の祭りでさえも、残り364日の日常よりも印象深く記憶に刻み込まれるものである。

このような祭の風景を、町の記憶と触れる場として捉えるならば、その意義は少なくない。近代以降の都市計画においては、日常の「ケ」という視点に偏っていたが、今一度、年に1度の「ハレ」の舞台としての環境を後世に継承するという発想を再評価してもよいのではないだろうか。それは、後世に残すべき文化資源であるからである。そのように考えれば、景観規制においても、祭事の行列からの眺めや、祭事の背景となる山並み、河川のたたずまいなどを扱うべきであろう。しかし、同時に、今の我々の見方で祭事を捉えることの危険性を強く認識しなければならない。あくまで、これまで人々が神仏をどのように見てきたか、どう関わってきたか、その本当の意味を理解することが肝要であると思われる。



図4 葵祭での鴨川と御蔭橋の風景^{注3)}



図5 四条河原夕涼 安藤広重筆^{注4)}

5. 水と生きた記憶

京都にはまだまだ異なる形で記憶が継承されている。その一つが水辺の風景であろう。京都に限らず、江戸も大坂も、近代までは水運が中心で、非常に豊かで生き生きとした水辺の町の風景が広がっていたことは、残された絵画資料などから読み取ることができる。特に広重の浮世絵に見られるような、幾層もの舟が行き交い、植物によって水際線が柔らかくぼかされ、水辺に張り出した濡縁や床の上に人々が休んでいる様からは、まさに町の水辺が人々にとって非常に愛着のある空間であったことがうかがえる。今では池泉式庭園を除いて、このような水辺の生き生きとした空間の型はほとんど見られなくなってしまったが、そのなかでも、鴨川の納涼床の楽しみ方を、みそそぎ川を付け替えることによって継承した先人の知恵は見事というほかない。こうして鴨川は風流な都市の水辺としてよみがえることに成功した。また、嵐山・大井川では古来貴族や風流な文人らが舟をうかべて遊んだが、その習慣を祭事として再現した三船祭は、平安時代以降の船遊びの風景を生き生きと現代によみがえらせた。

これらは数少ない例であり、実際には先人らが心地よいと思ってきた風景の型の多くを、我々は失ったままである。現代の技術によって、防災面や維持管理の要求を満たしながら、水辺での人々の楽しみ方を代償的に再現することはそれほど難しいことなのだろうか。日本人が育ててきた水辺の風景は、決してヴェネチアやオランダの都市のものに劣ることはないだろう。ただ、それを実現するすべを今までは持っていなかっただけである、とりたい。

6. 無数の無名な人々の物語が、町の雰囲気醸し出す

町の雰囲気をつくりだすのは、誰しもが知っている「集団的な」名所だけでない。むしろ、多くの場合、無数の「個人的な」人生の記憶が、町の雰囲気を決定づけている。生活の匂いが染み出た親密な路地を通るとき、いつも私は、まるで家の中に入り込むような、ちょっとした罪悪感と、宝探しをするような期待が入り混じっていることに気づく。そんななかで、思いもかけない時代の残り香を放つ風景に出会うときや、よく手入れされた鉢植えの好ましい姿から住民の人となりに触れたときなどには、何ともいえない、しみじみとした味わいを噛み締めることができる。路地にはむしろ、そういった個人の住まい方が現れている。そんな路地も、夜になると町全体で一つの世界を作り出す。闇の中に沈む京町家と対照的に、街灯に照らされて浮かび上がる石畳、格子から漏れる灯り、わずかに感じる人の気配。そんな谷崎潤一郎や梶井基次郎が歩いたかもしれない路地を、私は、彼らを感じた風流を想いながらそぞろ歩くのである。



図6 樋口一葉の菊坂旧居跡の路地



図7 知恩院近くの町家

横丁や高架下の古い飲み屋も、景観的には美しいとはいえないかもしれないが、愛着をわかせるものである。そういった場所には、私が生まれるずっと前の時代の匂いがあり、趣のある雰囲気を出している。そういったものに触れることができるのが、町の魅力である。どこに行っても同じ匂いしか感じとれない町などつまらない。

先日、東京を久しぶりに訪れた際に、東京ミッドタウンや六本木ヒルズ、丸の内界隈を訪れ、非常に洗練された内装のデザイン、きれいな並木や緑地、何よりその規模に、「これはもう一つの町である」と驚いた。買い物するには便利で、楽しみにも満ちている。しかし、何かが足りない。そう感じるの、その場所に武家屋敷や町屋の面影がないからだろうか、いや、画一的で多様性に欠けるからだろうか、それとも、自分なりの意外な発見が得られないからだろうか。一通り考えた結果、やはりこの町には、町の風情というか、余韻というか、そういったものが根本的に欠落しているのだ、と思い至った。本郷や谷中、代官山と比べてみると一目瞭然で、このような大規模商業施設型開発は、見た目はきれいでも、深みのないものしか生み出せない、ということを実感したのである。

今、関西の若者は、例えば大阪なら堀江、神戸なら元町、京都なら裏寺町といったような古いオフィス街や路地裏に集まり、町を新しく作り変えようとしている。彼らがそこに目をつけた理由は定かではないが、この路地裏で生まれ変わりつつある町は、古い町の面影と相まって、その場所らしさにあふれている。買い物にしても、散策にしても、こういった町の記憶や、そこに生きた人々の物語を、町のたたずまいから直に感じとれる町に暮らすことで得られる満足は決して小さいものではない。もちろん古ければいいというわけではない。ただ、新たな開発によってその土地の記憶を消し去ってしまうことに対しては嫌悪感を感じずにはいられない。

7. 記憶の風景の創造的な継承に向けて

7.1 我々は風景の、どの解釈を選ぶのか？

町の記憶、物語は様々で、風景には様々な解釈がある。私が述べてきたのは一つの解釈に過ぎない。今日では、歴史・文化に加えて、経済効率やエコロジーという概念、眺望を享受したいという欲求など、風景に対する評価規範は驚くほど多様になっている。そしてこの解釈の多様性こそが、本来あるべき風景を破壊してしまうのではないかと危惧するのである。本来あるべき風景とはつまり、町の歴史や伝統に対する正しい理解の上で人々に共有される風景であり、人々が愛着を持ち続けられる風景であるだろう。解釈の多様性は必然的に、対立の構図や自己矛盾を孕んでいる。一つの解釈を意図的に選ぶという決断も、記憶の継承のためは、ときに必要なのである。では、どの解釈を選ぶべきか、という課題が浮かび上がる。

7.2 唯一無二の歴史的産物としての風景

風景とは、それを見つめる人間と無関係に成立しうる空間なのではなく、人間のまなざしによって歴史の中で構築されてきた、様々な解釈の歴史の上にある、と、私は考えている。そして、風景は客観的な現象ではなく、唯一無二の歴史・文化的な産物であると考えている。この考えを基にした、私の主張は、町と人々とが長い歴史の中で作り上げてきた関係をきちんと読み込んだ上で、歴史的必然性を風景づくりの決断基準とするべきだということである。ただし、ここで気をつけなければならないのは、歴史とは本質的に、ひとつの解釈にすぎず、客観的に決められるものでもないことを肝に銘じておくことである。

7.3 記憶の風景を後世に残すために

それでは、町の記憶を風景としてとどめておくためには、どうするべきか。風景の保全をすることが重要なのか、いや、そのような単純な話ではない。ここで、今道友信氏の「美の位相論」を取り上げたい。今道氏は、山河の美しさ、芸術の美しさ、人格の美など、美は、さまざまな位相をとって人間の前に立ち現われ、さまざまな意味と解釈の位相を持っている、とする。この美の位相は、意識の位相であるとも言える。位相に限りはなく、新たな美は常に発見される可能性を持っている。このように考えれば、新たな美はまだまだ生み出していくことが望ましいが、その一方で、歴史的にみて根拠のある記憶の風景は、一つの位相として確立すべきである。記憶の風景はストックと捉えるべきなのである。新たな開発においては、その価値を損なわず、むしろそれを強めるように、創造的に行うべきであろう。これまでに述べたような、文学の風景、神々の風景、人々の物語の風景は、武蔵野のように、場所の「記憶として」のみ残すのではない。現代においても、可能な限り、実際に体験することのできる風景として創造的に継承すべきである、ということである。こうして、後世の人々は、町の記憶を、文献からだけでなく、生き生きとした風景体験を通じて、学ぶことが出来るのである。これは、これからの日本の新しい文化創造の源となるに違いない。逆に、これを喪失することは、町に対する関心の低下につながり、さらなる風景の喪失を促すのである。

記憶の風景の創造的な継承を実現しようとするれば、まず、社会的に共有されている風景の価値を再認識することが必要であるだろうし、鋭い目をもつ風景の観察者が個人的に発見した美を、社会的に共有させる仕組みも必要であろう。何より、きめ細かな風景の計画を行う必要がある。また、社会的に共有されていたが既に失われてしまったもので、現代において再生させるべきものを掘り起こすことも、時には必要であろうし、実際にそういった昔の記憶が、現実の環境の改変・整備の手がかりになり得る可能性は少なくない。維新後、そして終戦後の京都に生きた人々は、そういった努力をし続けてきたのである。彼らの想いは、現代に生きる我々に大きな勇気を与えてくれるのである。

【注、参考文献】

注1 京都市 市政総合アンケート調査「京都観光」, 2003

注2 京都市 市政総合アンケート調査「歴史都市・京都の創生 ～京都の景観を守るために～」, 2005
上記のいずれも 20 歳以上の京都市民 3000 人を対象として行われた。

注3 中川邦昭『都百景』, 京都新聞社, 1994

注4 安藤広重筆『四条河原夕涼』19 世紀前半

山崎正史編『京の都市意匠 景観形成の伝統』, プロセスアーキテクチャ, 1994

松尾芭蕉著, 井本農一・久富哲雄校注・訳『嵯峨日記』, 新編日本古典文学全集 松尾芭蕉集 2, 小学館, 1997

古地図ライブラリー 3 『広重の大江戸名所百景散歩』 人文社, 1996

今道友信『美について』 講談社, 1973

(総文字数 : 6746 字)